

沖縄在来「みやななご」絵本・紙芝居・歌プロジェクト ～奇跡の軌跡を子どもたちへ伝えたい～

みやななごproject代表 きんじょう そのみ
金城 園美

はじめに・・・

戦後、沖縄のいのちを救ったキセキのお芋【みやななご（宮農7号）】。そんな先人たちが遺してくれた【みやななご】の実話を通して、『沖縄の伝統作物の継承』と『いのちの尊さ』を伝えるために、多くの子どもたちへ絵本・紙芝居・歌にして伝えたい！

私は、2018年3月まで、沖縄県内中学校の音楽教諭として勤務し、常にすべての子どもたちが自分を大事に生きる心、すなわち自尊心を育むために必要なことは何かということを見据えながら教育に携わってきた。

今回、「みやななごproject」を立ち上げる際に、今の時代の流れの中で新しい手法ともいえるクラウドファンディングへの挑戦が出来たことで、私の心の奥にあった思いが現実のものとなることへ繋がったと言っても過言ではない。

このプロジェクトは、多くの子どもたちとの関わりの中で経験し感じてきたことを生かし、絵本・紙芝居・歌に思いをのせて奇跡の軌跡を伝えていきたいという、私の心に火が灯ったことから始まった。

ちょっと待ってこれ

子どもたちに伝えないと！

はじまりはそう、あのキセキのお芋

【みやななご】との出会いだった。

2020年の冬至の日、私はとあるワークショップで農業体験をするために、沖縄県南部にある畑へ赴いた。ここは細々とだが、みやななごの普及活動を行っていた、たった一人の農家さんだった。後に共に【みやななごproject】の活動を行うこととなった私の右腕となる方である。ここで【みやななご】のお話を伺うことができたのだ。

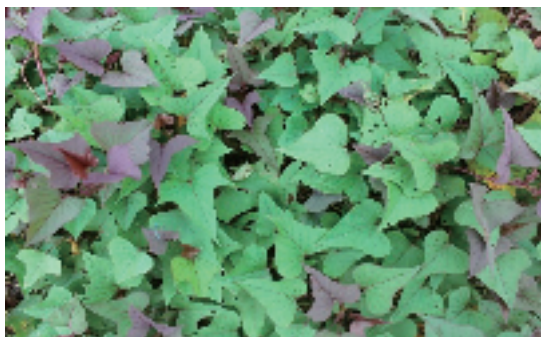


図1. 宮農7号（みやななご）

日本のお芋栽培が始まったのは、ここ沖縄から！沖縄では、お芋は昔から換金作物ではなく、自給作物として栽培されてきた伝統作物の一つであった。芋を護り育てていく・伝えていくためのドラマのような人と人との繋がりが、お芋のstoryの背景に描かれており、私はその背景に感銘を受けると同時に、沖縄の伝統作物が失われつつあるという厳しい現実を知った。飽食の時代を迎え、食文化が変化し、伝統作物を口にする機会が減少することによる栽培の激減、さらに栽培しやすい近代品種への移り変わりなど、これは、お芋に限った話ではない。

現在、様々な伝統作物が同じように失われつつある。また、それと同時に失われてきた「畑の多様性」そして、そこから生まれてしまった様々な負のスパイラル。たった一つの作物から見えてくる沖縄の農業と伝統作物の現実・・・。

そんな中で【みやななご】との出会いが私の心を激しく動かした。かつて、生きる源となった伝統作物を、この先も大事に育てていくこと、私たちが普段食しているものは、口にするまでに関わっているすべての人の思いが詰まっている大切なものだという事。さらに、すべてのものの「いのち」をいただいて私たちが今生きていることに感謝すること・・・これらを子どもたちに伝えたい！ 伝えないと！・・・

本気だった・・・私。

宮農7号とは

1947年に宮古民政府産業試験場の垣花実記氏により育成された甘薯（さつまいも）。73年前の戦後の食糧難の中で栽培され、

沖縄県民の食生活を支えてきた。しかし、現在の沖縄では加工用品種が普及したこともあって栽培が途絶えてしまい、現物は保存されていなかった。そんな宮農7号が、竹富町の黒島における聞き取り調査などを経て、2017年10月に再発見された。なんと、残っていたのは民家の畑の一角で自生している1株のみ。現地に住む女性(当時84歳)の畑で数年前まで栽培されていたものだった。女性は「宮農7号はいっぱい収穫でき、甘くておいしかった」と語る。現地ではみやななごと呼ばれており「みや(のう)ななご(う)」が変化した呼び名ではないかと推測されている。70年以上、民間レベルで繋がれてきた宮農7号。このイモが研究機関ではなく、民間レベルで繋がれてきたということは、とても凄いことだ。

これまでの活動

「みやななご(宮農7号)」が発見されてからこれまで、沖縄県民の誰もが食べられるほどには生産・販売が行われて来なかった。しかし、たくさんのご縁が重なって、約1年前に「みなななごproject」が動き出した。規模は小さいが、お芋や苗の普及活動により沖縄県内の100名以上の方々に直接届けることができた。日本国内のお芋栽培は、ここ沖縄から始まり、過去には、沖縄には様々なお芋の在来品種が存在していたが、今やそのほとんどが消失してしまっている。奇跡的に発見された「みやななご」を未来へつなぐためにも、お芋の需要拡大、生産拡大は重要な課題である。地道な普及活動も必要だが、私たちはこの活動を一過性のもので終わらせるのではなく、持続的に次世代へ継承するためにはど



図2. 沖縄いいイモの日（11月16日）
沖縄いもづるの会ブース

うすれば良いか・・・

その課題解決のための一つ的手段として、「みやななご」のストーリーを絵本にして、伝統作物の継承、種の多様性、そして「いのち」の大切さを多くの子供たちに伝えたい！と考えた。「教育」と「農業」の柱をもって伝え繋げることは、きっと未来の子どもたちのみならず、全ての人が「いのち」について考え、ひいては「生きる」とは・・・ということまで考えていけることに繋がると信じている。

～奇跡の軌跡～ を絵本と紙芝居と歌で！

「いのちを救ったお芋は上座に祀る」 沖縄の歴史の中には、そんな言葉が遺されている。私が一番に伝えたいこと、それは『いのちの尊さ』である。いのちの尊さというと、あまりにも当たり前すぎると感じるが、全ての生き物には『いのち』があり、伝統作物の継承も、私たちの命が先祖代々繋がってきたことも、同じ『いのち』の営みである。その『いのち』というものを考えた時、繋がる『いのち』があったからこ

そ今がある。今の私たちがいる。一人にひとつずつ大切な『いのち』だからこそ、その『いのち』を真剣に意識していくことが必要だと思っている。【みやななご】は、戦後沖縄の人々のいのちを救ったお芋だった。このお芋がなければ生きてこれなかった・・・このお芋がなければいのちが繋がらなかった・・・【みやななご】を奇跡のお芋で終わらせるのではなく、誰もがいつでも食べられる・・・そんなお芋にしたい！そんな先人たちが遺してくれた【みやななご】を通して、『いのち』の尊さを伝えるため、絵本・紙芝居・歌にしてお届けしたい！奇しくも2022年は沖縄県本土復帰50周年という大きな節目の年であった。戦後の沖縄の人々のいのちを救った【みやななご】の思いを伝えるのはまさに2022年だと感じた。

クラウドファンディングへの挑戦！

どんなに思いがあっても、絵本が形にならないければ届けることも、思い描く姿で伝えていくこともできない。全てが初めての

ことだらけだったが、2022年5月クラウドファンディングへの挑戦を決めた。私たちの思いがどこまで届くのか走り続ける日々が続いた。ありがたいことに、共感して下さり、心を寄せて下さる方が、北は北海道、南は宮古島、さらに国境を越え米国まで…多くの皆さまのご支援のおかげで、無事に目標に達成することができた。なんとそれが、中秋の名月「芋名月」の時だった。お芋の神さまがきっと応援して下さっていると思わずにはいられなかった。

そこから一気にスピードを加速させ、絵本の仕上げに向けて作業が進んでいった。クラウドファンディング期間中も絵本のみならず、楽曲の制作や、歌の練習など前だけを向いて準備に励んでいた。全ては11月16日の沖縄いいイモの日に焦点を合わせて……。その日に絵本の寄贈式を執り行

いたいという思いからだった。2022年11月16日沖縄県全小学校・特別支援学校への寄贈式を沖縄県教育庁で無事に実施することができ、その結果、県内の子どもたちの元へとお届けすることが現実的なものとなった。公立の学校のみならず、県内フリースクール・インターナショナルスクールへの寄贈も併せて行うことができた。そんな中、とあるインターナショナルスクールの学校長から嬉しいお便りが届いた。「“沖縄を知る・学ぶ”授業を通して多文化理解、相互の尊重、平和な世界への創造への教育と結びつきます。琉球のアイデンティティを大切に学び取るため、初等部のしまくとぅば授業や沖縄歴史と文化の探求学習などに活用させていただきます」。日本人のみならず、多国籍の子どもたちの教育の場においても、琉球のアイデンティティにまで繋が



図3. うむふえす2022 in 読谷

ることができるのなら、この上ない喜びである。

うむふえす2022 in 読谷

時同じくして、2022年11月20日、みやななごprojectが発起人となり、県内初となる“～いも好きによる いも好きのためのいもの祭典～うむふえす2022in 読谷”を開催した（主催：沖縄いもづるの会、みやななごproject、読谷村、JA ゆんた支店、協賛・協力：やきいも繁多川堂）。

私たちは、絵本のお披露目（読み聞かせ）・歌の披露・フリースクールへの寄贈式の他、いも談議では「沖縄のいも 今と昔」、「沖縄のいも 破壊と再生～未来へ～」という様々な角度から「沖縄のいも」について考える機会とした。また、子どもたちにも喜んでもらえるように「おいも〇×ゲーム」、出店ブースでは、県内の焼き芋屋さん等のご協力もいただき、予想以上の大盛況の中無事に終えることができた。未知数のことだらけであったが、来場者からも“また来年もぜひやってほしい”という沢山の声をいただけた。微力ながらも「沖縄のいも」の現状について、そしてその未来について考えていくひとつの扉を開くことができたのではないかと感じている。

ご縁と繋がり

2020年12月の冬至に【みやななご】と出会い、絵本を制作できるのは、5年後、10年後に叶っていたらいいなと描いていた夢が、クラウドファンディングへの挑戦を決めてから絵本の完成までわずか半年足らずで現実のものとなった。これもひとえに、数えきれないくらいの多くの方々のお力添

えがあったからこそ実現できたものである。ここへ来るまでの日々は、ほんとに人と人とのご縁を深く感じずにはいられない毎日だった。直接的な繋がりのある方もそうでない方も、顔を合わせたことのない方までも、それこそイモヅルのように様々な関係性の中で培われてきた繋がり、温かいご縁となって、絵本をこの世に誕生させることができたのだ。感謝ということでは足りないくらい日々ありがたい気持ちでいっぱいである。その繋がりの中で、深いご縁をいただいた方からの俳句に胸が熱くなった。

『 みやななご 夢の叶いて 秋麗 』

『 みやななご 甘藷一株 黒島に 』

『 芋名月 飢えを凌ぎし 日の遠き 』

『 みやななご 万代までも 豊の秋 』

今後の活動

2023年は、真の意味でのはじまりの年だと思っている。「在来作物の継承」と「いのちの尊さ」を伝える活動をしっかりと地に足をつけて行っていくことである。

具体的な活動としては、沖縄県本島・離島問わず、絵本の読み聞かせ活動をまずは子どもたちの世界で。時には大人向けにも行っていくことと、農業体験活動において【みやななご】の苗を植え付けそして、お芋が太る秋には収穫し食しながら、【みやななご】を感じる世界を確実に形にしていくことである。

2017年に奇跡的に発見されたたった一本

の蔓が地をはうように生きていたあの黒島で、いつの日か読み聞かせができるといいなという願いが、なんとこの春実現する運びとなった。黒島の子どもたちは何を感じてくれるのか・・・今からとても楽しみである。

ウムヌ ウムイ

2020年冬至。あの日心の中に沸き起こった一つの灯が、絵本という形としてこの世に誕生できたことに大きな喜びを感じる。これからの活動もまた、一人では成し遂げられないであろう。仲間と共に同じ方向を見て心を一つに協力し合い、支え合いながら活動を続けていく中で、未来の沖縄・未来の子どもたちのために一つの道が作れて



図4. 絵本「ウムヌ ウムイ」

いたなら本望である。一人ひとりにとって『いのち』はたった一つ。一人にひとつずつの大切な『いのち』。私たちの想いが詰まった【ウムヌ ウムイ】。

すべての人に感謝して・・・。